

# 昭和のテレビ(ラジオ)物語:第4話【しろと寄席】

2022.5

冗句大学笑学部 毛減狂寿(高橋揚一)



ミシミレドレツレレ、シッシシラソドッドド、フィフィ〜イ。毛減先生今晚は。やあ今晚は、元気かね? 何でも考えかんでも知って、何でもかんでもやってみよう。さて今日は…。

♪恋をしましょう恋をして〜 浮いた〜浮いたで暮らし〜ましょ 熱っ  
い涙も流しましょ 昔の人は言いました 恋は〜するほど〜艶が出る〜  
恋はす〜るほど〜艶が〜出る♪

「なーんてね…畠山みどり…こんな歌に歌われるような恋がしたかった  
ですね……2番の歌詞なんか…そういうこと知ってたら……ねえ」

♪昔の人は言いました いやよ〜いやよも〜好きのうち〜 いやよい〜  
やよも〜好きの〜うち♪

「私なんか随分損しましたね…いやよいやよも好きのうちってんですから  
……ええ〜っ…ですよね…いやって言われても好きなんですって…ほん  
とですかねえ……ほんとなんでしょね、昔の人が言ったんすから」

これだけで演芸場は大爆笑。

「いやっいやっいやっいやっ………こんなのはダメでしょうけどね」

さらに大爆笑。

牧野周一。ラジオ番組『しろと寄席』の司会も務めた間の天才。

1905年〜1975年。享年70歳2ヶ月12日。毛減は本日70歳3ヶ月21日目  
なので牧野天才より40日分だけ長生きしていることになる。

ただ、当時の芸人としては随分と高齢まで現役で高座に立っていた。

徳川夢声に弟子入りし、サイレント映画の弁士を経て、漫談家に転じて  
いる。弟子のポール牧と牧伸二は、どちらもテレビで若干下品系の人気  
を博してはきたが、知性の面では牧野師匠を超えることはなかった。

年齢の割に都会の香りのするネタが多かった。

「戦後になってね…横書きの文字は左から右に書かれるようになった  
でしょ…駅名の表示はどうするかってね…山手線の駅長が集まって会議  
を開いたっていうんですよ…オレンところは左書きに改めるとかオレンところは  
右書きのままでもいい、とか、みんな喧喧諤諤になっちゃってね……ところ  
が一人だけしょんぼりしてる駅長がいるんですよ……オレはどっちでもい  
いやって………隣に座った駅長が、オマエどうしたんだよって……オレは  
どっちでもいいんだよ…オレンところは田端だから」

滅多に東京に連れて行ってもらえなかった小学生にとって、東京の国  
電のネタは洗練された憧れの対象として耳に入った。

「駅のアナウンスってものは…どうしてあんなに味気ないんでしょうね…  
ナカノー、ナカノー、なんてね…もっと楽しくできないもんっすかね」

♪ナカナカナカナカナ〜カノ、ナカナカナカナカナ〜カノ♪

「こんなことにはならないでしょうけど」

駅のアナウンスが変貌したのは、それから数十年も経てからだ。

♪貫一さん下駄で女を蹴るなんて 明治時代で良かったね えー今  
じゃたちまちつるし上げ 月を涙で曇らせて 井たたいて憂さ晴らし  
何が何して何とやら さておしまい ちょうど時間と〜なりま〜した〜♪

畠山みどりでしめくり。お後がよろしいようで……。



恋は神代の昔から



牧野周一



牧伸二と牧野周一



ちょうど時間となりました

以上